

第 IX 部 母平均の差の検定

目次

第 IX 部	母平均の差の検定	1
9	母平均の区間推定	4
9.1	はじめに	4
9.1.1	ポイント	4

目次		目次
9.1.2	期待値と分散	5
9.2	独立な 2 つの確率変数	6
9.2.1	$\mathbf{X} + \mathbf{Y}$ の期待値	7
9.2.2	$\mathbf{X} + \mathbf{Y}$ の分散	9
9.2.3	母集団と標本平均	13
9.2.4	正規母集団	13
9.2.5	正規分布	14
9.2.6	標準化	14
9.2.7	正規分布の 95% 信頼区間	15
9.3	不偏分散	16
9.4	χ^2 分布	23

目次		目次
9.5	t 分布	24
9.5.1	標本平均	25
9.5.2	標本分散	25
9.5.3	χ^2 統計量	26
9.5.4	標本分散を使った t 分布	28
9.6	母平均の差の区間推定	30
9.6.1	母分散が既知の場合	30
9.6.2	母分散が未知の場合	32
9.7	まとめ	34

9 母平均の区間推定

9.1 はじめに

- 平均値の差の検定では平均値の差があるかどうか判断されます。
- 差があると分かっている状況で、その差がどの程度なのかを推定します。

9.1.1 ポイント

- 母分散が既知の場合の平均値の差の区間推定
- 母分散が未知の場合の平均値の差の区間推定

9.1.2 期待値と分散

定義

確率変数 $X = x_i$ と $\Pr(x_i) = p_i$ の積の総和を『期待値』といい、 $E(X)$ であらわす。

$$E(X) = \sum_{i=1}^n x_i p_i \quad (1)$$

定義

確率変数 $X = x_i$ の期待値 $E(X)$ からの偏差の二乗の期待値を『分散』といい $V(X)$ であらわす。

$$V(X) = E(X - E(X))^2 \quad (2)$$

9.2 独立な 2 つの確率変数

2 つの独立な確率変数 X, Y を考える。

$$X = x_i \quad ; i = 1, 2, \dots, n \quad (3)$$

$$Y = y_j \quad ; j = 1, 2, \dots, m \quad (4)$$

とし、それぞれの確率を

$$\Pr(x_i) = p_i \quad (5)$$

$$\Pr(y_j) = q_j \quad (6)$$

とする。すると、

$$\sum_{i=1}^n p_i = 1 \quad (7)$$

$$\sum_{j=1}^m q_j = 1 \quad (8)$$

であって、 X と Y の同時確率は

$$\Pr(x_i, y_j) = p_i q_j \quad (9)$$

である。

9.2.1 $X + Y$ の期待値

$X + Y$ の期待値を求める。

$$E(X + Y) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m (x_i + y_j) p_i q_j \quad (10)$$

$$= \sum_{i=1}^n \left(\sum_{j=1}^m (x_i + y_j) p_i q_j \right) \quad (11)$$

$$= \sum_{i=1}^n p_i \left(\sum_{j=1}^m (x_i + y_j) q_j \right) \quad (12)$$

括弧内総和部分を展開し、

和の総和を総和の和であらわし

$$= \sum_{i=1}^n p_i \left(\sum_{j=1}^m x_i q_j + \sum_{j=1}^m y_j q_j \right) \quad (13)$$

括弧内第 1 項からは共通因数として x_i を j に関する総和から掃き出し、第 2 項は Y の期待値なので

$$= \sum_{i=1}^n p_i \left(x_i \sum_{j=1}^m q_j + E(Y) \right) \quad (14)$$

q_j の総和は 1 なので

$$= \sum_{i=1}^n p_i (x_i + E(Y)) \quad (15)$$

総和内を展開し

$$= \sum_{i=1}^n (x_i p_i + p_i E(Y)) \quad (16)$$

和の総和を総和の和であらわし

$$= \sum_{i=1}^n x_i p_i + E(Y) \sum_{i=1}^n p_i \quad (17)$$

第 1 項は X の期待値であり、第 2 項の総和部分は p_i の総和なので 1 だから

$$= E(X) + E(Y) \quad (18)$$

9.2.2 $X + Y$ の分散

補題 1

$$E(XY) = \sum_{i=1}^n \sum_{j=1}^m x_i y_j p_i q_j \quad (19)$$

$$= \sum_{i=1}^n \left(x_i p_i \sum_{j=1}^m y_j q_j \right) \quad (20)$$

括弧内総和部分は Y の期待値なので

$$= \sum_{i=1}^n (x_i p_i E(Y)) \quad (21)$$

期待値は定数なので総和の外に掃き出す。

$$= E(Y) \sum_{i=1}^n (x_i p_i) \quad (22)$$

括弧内総和部分は X の期待値なので

$$= E(X)E(Y) \quad (23)$$

補題 2

$$E(X - E(X))(Y - E(Y)) = E(XY - XE(Y) - YE(X) + E(X)E(Y)) \quad (24)$$

$$= E(XY) - E(X)E(Y) - \cancel{E(X)E(Y)} + \cancel{E(X)E(Y)} \quad (25)$$

$$= E(XY) - E(X)E(Y) \quad (26)$$

$$= E(X)E(Y) - E(X)E(Y) \quad (27)$$

$$= 0 \quad (28)$$

$X + Y$ の分散

$$V(X + Y) = E \left(\left((X + Y) - E(X + Y) \right)^2 \right) \quad (29)$$

$$= E \left(\left(X + Y - E(X) - E(Y) \right)^2 \right) \quad (30)$$

$$= E \left(\left((X - E(X)) + (Y - E(Y)) \right)^2 \right) \quad (31)$$

$$= E \left((X - E(X))^2 + 2(X - E(X))(Y - E(Y)) + (Y - E(Y))^2 \right) \quad (32)$$

和の期待値を期待値の和であらわし

$$= E \left((X - E(X))^2 \right) + 2E \left((X - E(X))(Y - E(Y)) \right) + E \left((Y - E(Y))^2 \right) \quad (33)$$

第 1 項と第 3 項はそれぞれ分散であり、第 2 項は補題 2 より 0 だから

$$= V(X) + V(X) \quad (34)$$

定理

X, Y を独立な確率変数とする。期待値と分散に関して以下の関係が成り立つ。

$$E(X + Y) = E(X) + E(Y) \quad (35)$$

$$V(X + Y) = V(X) + V(Y) \quad (36)$$

9.2.3 母集団と標本平均

母集団の分布に関わらず、十分に大きなサンプル・サイズをとった標本の標本平均は正規分布に従う。母平均を μ 、母分散を σ^2 とする。サンプル・サイズが n の標本平均を \bar{X} であらわすと、

$$E(\bar{X}) = \mu \quad (37)$$

$$V(\bar{X}) = \frac{\sigma^2}{n} \quad (38)$$

である。

9.2.4 正規母集団

正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従う母集団を『**正規母集団**』という。

正規母集団から抽出されたサンプル・サイズ n の標本の標本平均 \bar{X} は

$$N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \quad (39)$$

に従う。

$$\bar{X} \sim N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \quad (40)$$

9.2.5 正規分布

確率変数 $X = x$ が標準正規分布に従う確率変数 $Z = z$ を用いて、

$$x = \mu + \sigma z \quad ; \sigma \neq 0 \quad (41)$$

とあらわせるとき、確率変数 X は、平均 μ 、分散 σ^2 の正規分布であるといい、 $N(\mu, \sigma^2)$ とあらわす。

9.2.6 標準化

確率変数 X が正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従うとき、 μ, σ を用いて、

$$z = \frac{x - \mu}{\sigma} \quad (42)$$

をつくると、 z は標準正規分布 $N(0, 1)$ に従う。

9.2.7 正規分布の 95% 信頼区間

標準正規分布 $N(0, 1)$ に従う確率変数 $Z = z$ の信頼区間は

$$-1.96 \leq z_i \leq 1.96 \quad (43)$$

である。

$$x \sim N(\mu, \sigma^2) \quad (44)$$

のとき 95% 信頼区間は

$$-1.96 \leq \frac{x_i - \mu}{\sigma} \leq 1.96 \quad (45)$$

なので、

$$\mu - 1.96\sigma \leq x_i \leq \mu + 1.96\sigma \quad (46)$$

9.3 不偏分散

正規母集団 $N(\mu, \sigma^2)$ からサンプル・サイズ n の標本を抽出する。抽出された標本の平均を『**標本平均**』といい \bar{X} であらわす。 i 番目の標本 A の要素を $x_i \in A$ であらわすと、標本平均は

$$\bar{X} = \frac{1}{n} \sum_{x_i \in A}^n x_i \quad (47)$$

である。

仮定により母平均は μ , 母分散は σ^2 である。ここで

$$E \left(\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \right) \quad (48)$$

を考える。

$$E \left(\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \right) = E \left(\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu + \mu - \bar{X})^2 \right) \quad (49)$$

$$= E \left(\sum_{x_i \in A}^n \left((x_i - \mu) + (\mu - \bar{X}) \right)^2 \right) \quad (50)$$

$$= E \left(\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu)^2 + \sum_{x_i \in A}^n 2 (x_i - \mu) (\mu - \bar{X}) + \sum_{x_i \in A}^n (\mu - \bar{X})^2 \right) \quad (51)$$

$$= E \left(\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu)^2 + 2 (\mu - \bar{X}) \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu) + n (\mu - \bar{X})^2 \right) \quad (52)$$

和の期待値は期待値の和なので

$$= \mathbf{E} \left(\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu)^2 \right) + \mathbf{E} \left(2 (\mu - \bar{X}) \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu) \right) + \mathbf{E} \left(n (\mu - \bar{X})^2 \right) \quad (53)$$

ここで、第 1 項は i ごとに母分散の定義 $\mathbf{E}((x_i - \mu)^2) = \sigma^2$ より、 $n\sigma^2$ 。

第 2 項総和部分は

$$\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \mu) = \sum_{x_i \in A}^n x_i - n\mu \quad (54)$$

$$= n\bar{X} - n\mu \quad (55)$$

$$= n(\bar{X} - \mu) \quad (56)$$

$$= -n(\mu - \bar{X}) \quad (57)$$

よって第 2 項は

$$E(2(\mu - \bar{X})(-n(\mu - \bar{X}))) = -2nE((\mu - \bar{X})^2) \quad (58)$$

$$(59)$$

上記から (53) は

$$= n\sigma^2 - 2nE\left((\mu - \bar{X})^2\right) + nE\left((\mu - \bar{X})^2\right) \quad (60)$$

$$= n\sigma^2 - nE\left((\mu - \bar{X})^2\right) \quad (61)$$

(61) 第2項期待値部分は標本平均 \bar{X} の分散なので $V(\bar{X})$ とあらわすと

$$V(\bar{X}) = V\left(\frac{x_1 + x_2 + \cdots + x_n}{n}\right) \quad (62)$$

$$= \frac{1}{n^2} V(x_1 + x_2 + \cdots + x_n) \quad (63)$$

各 x_i は独立なので分散の和に分解すると

$$= \frac{1}{n^2} (V(x_1) + V(x_2) + \cdots + V(x_n)) \quad (64)$$

定義により $V(x_i) = \sigma^2$ なので

$$= \frac{1}{n^2} n \sigma^2 \quad (65)$$

$$= \frac{\sigma^2}{n} \quad (66)$$

よって (48) は

$$n\sigma^2 - n \times \frac{\sigma^2}{n} = n\sigma^2 - \sigma^2 \quad (67)$$

$$= (n-1)\sigma^2 \quad (68)$$

上記の結果から

$$E\left(\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2\right) = (n-1)\sigma^2 \quad (69)$$

右辺の $(n-1)$ を払うと

$$\sigma^2 = \frac{E\left(\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2\right)}{n-1} \quad (70)$$

$$= E\left(\frac{\sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2}{n-1}\right) \quad (71)$$

この期待値括弧内の値を s^2 であらわし、『**不偏分散**』という

定義

サンプル・サイズ n の標本の i 番目の要素を x_i とし、 \bar{X} を標本平均とする。このとき

$$s^2 = \frac{\sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2}{n-1} \quad (72)$$

を『**不偏分散**』といい、 $n-1$ を自由度という。

不偏分散の期待値は (71) より σ^2 である。

9.4 χ^2 分布

標準正規分布 $N(0, 1)$ に従う n 個の独立な確率変数 z_1, z_2, \dots, z_n の平方和をつくり $\chi_{(z)}^2$ とあらわす。

$$\chi_{(z)}^2 = \sum_{i=1}^n z_i^2 \quad (73)$$

このとき、 n を『自由度』といい ν とあらわす。そして $\chi_{(z)}^2$ の従う分布を『自由度 $\nu = n$ の χ^2 分布』という。

9.5 t 分布

標準正規分布 $N(0, 1)$ に従う確率変数 z と、これとは独立に自由度 $\nu = n$ の χ^2 に従う確率変数 $\chi^2_{(z)}$ を用いて統計量を作り $t_{(z)}$ であらわす。この統計量

$$t_{(z)} = \frac{z}{\sqrt{\frac{\chi^2_{(z)}}{\nu}}} \quad (74)$$

が従う分布を『 t 分布』という。このとき、 $\nu = n$ を t 分布の『自由度』という。

- t 分布は $t_{(z)} = 0$ を中心に左右対称の釣り鐘型の形状をしている。
- t 分布の形状は自由度 $\nu = n$ により異なり、自由度 $\nu = n$ が大きいときには標準正規分布によく近似する。

9.5.1 標本平均

$N(\mu, \sigma^2)$ に従う n 個の確率変数 x_i の平均を『標本平均』といい、 \bar{X} であらわす。標本平均 \bar{X} は、平均 μ 、分散 $\frac{\sigma^2}{n}$ の正規分布 $N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right)$ に従う。

標本平均を標準化した

$$z = \frac{\bar{X} - \mu}{\left(\frac{\sigma}{\sqrt{n}}\right)} \quad (75)$$

は標準正規分布に従う。

9.5.2 標本分散

標本平均からの偏差の二乗の平均を『標本分散』といい $V_{\bar{X}}$ であらわす。

$$V_{\bar{X}} = \frac{1}{n} \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \quad (76)$$

標本分散の正の平方根

$$D_{\bar{X}} = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2} \quad (77)$$

は標本の『標準偏差』である。

9.5.3 χ^2 統計量

正規分布 $N(\mu, \sigma^2)$ に従う確率変数 x_i を標準化した確率変数

$$z_i = \frac{x_i - \mu}{\sigma} \quad (78)$$

は標準正規分布 $N(0, 1)$ に従うのだから、 $N(\mu, \sigma^2)$ から大きさ n の標本 A についての $\chi^2_{(\mu)}$ 統計量

$$\chi^2_{(\mu)} = \sum_{i=1}^n \left(\frac{x_i - \mu}{\sigma} \right)^2 \quad (79)$$

は自由度 $\nu = n$ の χ^2 分布に従う。

μ の代わりに標本平均 \bar{X} を使った統計量

$$\chi^2_{(\bar{X})} = \sum_{i=1}^n \left(\frac{x_i - \bar{X}}{\sigma} \right)^2 \quad (80)$$

は自由度 $\nu = n - 1$ の χ^2 分布に従う。

ここで (80) を整理すると、

$$\chi^2_{(\bar{X})} = \frac{1}{\sigma^2} \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \quad (81)$$

$$= \frac{n}{\sigma^2} \frac{1}{n} \sum_{x_i \in A}^n (x_i - \bar{X})^2 \quad (82)$$

$$= \frac{nV_{\bar{X}}}{\sigma^2} \quad (83)$$

9.5.4 標本分散を使った t 分布

標準化において μ に代えて標本平均 \bar{X} を用いた統計量

$$\chi^2_{(\bar{X})} = \frac{nV_{\bar{X}}}{\sigma^2} \quad (83)$$

の両辺の平方根をとり、 $D_{\bar{X}} = \sqrt{V_{\bar{X}}}$ とすると

$$\sqrt{\chi^2_{(\bar{X})}} = D_{\bar{X}} \frac{\sqrt{n}}{\sigma} \quad (84)$$

である。

この $\chi^2_{(\bar{X})}$ の自由度は $\nu = n - 1$ である。

$N(\mu, \sigma^2)$ の正規母集団から抽出されたサンプルサイズ n の標本の標本平均 \bar{X} は

$$N\left(\mu, \frac{\sigma^2}{n}\right) \quad (85)$$

に従うから、標本平均 \bar{X} を標準化した確率変数 z は

$$z = \frac{\bar{X} - \mu}{\frac{\sigma}{\sqrt{n}}} \quad (75)$$

$$= (\bar{X} - \mu) \frac{\sqrt{n}}{\sigma} \quad (86)$$

である。

これらを (74) に代入すると

$$t_{(\bar{X})} = \frac{z}{\sqrt{\frac{\chi^2_{(\bar{X})}}{\nu}}} \quad (74)$$

$$= z \frac{\sqrt{\nu}}{\sqrt{\chi^2_{(\bar{X})}}} \quad (87)$$

$$= (\bar{X} - \mu) \frac{\cancel{\sqrt{n}}}{\sigma} \frac{\sqrt{\nu}}{D_{\bar{X}} \cancel{\frac{\sqrt{n}}{\sigma}}} \quad (88)$$

$$= \frac{(\bar{X} - \mu) \sqrt{\nu}}{D_{\bar{X}}} \quad (89)$$

ここで $\chi^2_{(\bar{X})}$ の自由度は $\nu = n - 1$ なので

$$= \frac{(\bar{X} - \mu) \sqrt{n-1}}{D_{\bar{X}}} \quad (90)$$

$$= \frac{\bar{X} - \mu}{\left(\frac{D_{\bar{X}}}{\sqrt{n-1}}\right)} \quad (91)$$

は自由度 $\nu = n - 1$ の t 分布に従う。ここで

$$D_{\bar{X}} = \sqrt{\frac{1}{n} \sum_{i=1}^n (x_i - \bar{X})^2} \quad (77)$$

である。

9.6 母平均の差の区間推定

平均値の差の検定で帰無仮説

$$H_0: \mu_x - \mu_y = 0 \quad (92)$$

が棄却された場合、母平均の差の区間推定を行う。

9.6.1 母分散が既知の場合

$$\frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}}} \sim N(0, 1) \quad (93)$$

なので、95 % 信頼区間は

$$-1.96 \leq \frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}}} \leq 1.96 \quad (94)$$

である。

これを、第 1 不等号右辺が $\mu_x - \mu_y$ となるように変形した

$$\bar{X} - \bar{Y} - 1.96\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}} \leq \mu_x - \mu_y \leq \bar{X} - \bar{Y} + 1.96\sqrt{\frac{\sigma_x^2}{n} + \frac{\sigma_y^2}{m}} \quad (95)$$

が、母平均の差 $\mu_x - \mu_y$ の 95 %信頼区間である。

9.6.2 母分散が未知の場合

$$\frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sum_{x_i \in A} (x_i - \bar{X})^2 + \sum_{y_j \in B} (y_j - \bar{Y})^2}{n+m-2}} \sqrt{\frac{1}{n} + \frac{1}{m}}} \sim t(n+m-2) \quad (96)$$

である。 t 分布の両側 5% の臨界値を

$$t(\nu, 0.05) \quad (97)$$

とあらわすと、

95 % 信頼区間は

$$-t(n+m-2, 0.05) \leq \frac{(\bar{X} - \bar{Y}) - (\mu_x - \mu_y)}{\sqrt{\frac{\sum_{x_i \in A} (x_i - \bar{X})^2 + \sum_{y_j \in B} (y_j - \bar{Y})^2}{n+m-2}} \sqrt{\frac{1}{n} + \frac{1}{m}}} \leq t(n+m-2, 0.05) \quad (98)$$

である。第1不等式右辺を $\mu_x - \mu_y$ とするように変形すると、母分散が未知の場合の母平均の差の95 % 信頼区間を得ることができる。

9.7 まとめ

- 母平均の差の検定では、差の有無のみが検定される。
- 母平均の差の検定で有意となったのちに、母平均の差の区間推定を行う。
- 母分散が未知か既知かで利用する分布が異なる。
- 母分散が既知の場合は正規分布で検定する。
- 母分散が未知の場合は t 分布で検定する。

参考文献

1. 『経済数学教室 1 巻』 小山昭雄著「岩波書店」1994 年 5 月 30 日
2. 『新体系 大学数学 入門の教科書 上下』 吉沢光雄著「講談社」2022 年 6 月 16 日
3. 『技術者のための高等数学 7 確率と統計 (原書代 8 版)』 E・クライツィグ著 田栗正章訳「培風館」2004 年 11 月 30 日第 8 版
4. 『データ解析のための数理統計入門』 久保川達也著「共立出版」2023 年 10 月 15 日初版
5. 『統計学入門』 東京大学教養学部統計学教室篇「東京大学出版会」1991 年 7 月 9 日初版
6. 『行動科学における統計解析法』 芝祐順・南風原朝和著「東京大学出版会」1990 年 3 月 20 日 初版
7. 『計量経済学の理論』 A.S. ゴールドバーガー著, 福地崇生・森口親司訳「東洋経済新報社」

1970 年 9 月 10 日 第 1 刷

8. 『計量経済学序説』 R.J. ウォナコット・T.H. ウォナコット著, 国府田恒夫・田中一盛訳「培風館」 1975 年 6 月 10 日初版
9. 『マーケティング・サイエンス』 片平秀貴著 「東京大学出版会」 1987 年 4 月 20 日初版
10. 『回帰分析』 佐和光男著 「朝倉書店」 1979 年 4 月 20 日初版
11. 『完全独習 統計学入門』 小島寛之著「ダイヤモンド社」 2006 年 9 月 28 日 初版
12. 『分散分析の基礎』 高橋敬子著「プレアデス出版」 2009 年 10 月 1 日